新書1

授業の腕をあげる法則

向山洋一 著

明治図書 1985

教師は「教育のプロ」である。

子どもを「教え育てる」ことを専門とする職業である。

だから当然「教え育てることのできる技術方法を持っている」ということが条件となる。

医師と比較してみるといいだろう。

私たちは、どんな医師を良いと思うだろうか。「明るく、優しく、公平であって、知性的である」医師は好ましいにちがいない。特に、人間と人間としてつきあう場合なら、これだけでいい。

しかし、私たちが患者として医師とつきあうとする。

「三日間、高熱が続いているのです」と言ったとき、医師が「それは、つらいでしょうね」という優しさを示してくれるだけで満足するだろうか。常識的な病気に「原因は分りませんし、治療方法も分りません。でも、とにかく一生懸命やってみます」という医師に命を預けるだろうか。

むろん、その病気が難病であって、本当に治療方法が分らないのならしかたがない。

しかし、医師としての「技術・方法」からすれば「分るはずである、治療方法はある」という場合に、「よく分りませんがとにかくやってみます」という医師に命を預けることはない。

つまり、医師は「医療活動をする技術なり方法なりを持っている」ことにおいて専門職なのであり、「技術・方法」を駆使して、患者の病気と闘ってくれるのである（この原稿を書いた直後、中堅医師の医療技術習得を義務づけるとの新聞記事が出た）。

教師も同じである。

教師も、「そういう場合はこのような方法があります」という「教育の技術なり方法なりを持っている」ことにおいて、専門職なのである。

ところが、「技術なり方法なりを持たないで」「とにかくやってみます。一生懸命やってみます」と言っている教師がいる。情ないことに、そうした心構えがあれば教師として立派であると思い込んでいる風潮が一部にある。

どんな職業の人でも、その仕事の技術なり方法なりを持っている。

大工さんは家を建てる技術・方法を持っており、自動車学校の先生は、運転技術を身につけさせる技術なり方法なりを持っている。

なぜ、学校の教師だけが「とにかくやってみます」という程度のことで、許されるのか？

なぜ教育の技術なり方法なりを持っていないで、子どもを教育するという大それたことをやっていられるのか？

私は不思議である。

授業開始のチャイムが鳴り終わった。子どもたちの前に立った私は、一つの指示を与えた（なお、私は「起立、礼」というようなことはやらない。このような形式で授業を律するのが私は嫌いである。中には、研究授業の時、参観者に向って「起立、礼」をさせている教師がいる。私は率直に言えば、このような行為を子どもにさせるのは反吐が出そうなほど嫌いである。それだけで、もうその教室から逃げ出したくなる）。

私は子どもたちの前に立って「全員起立」と静かに言ったのである。そして「プリントを読み終わったらすわりなさい」と続けた。

これだけである。これですべてである。

二　跳ばせる技術

跳び箱を跳ばせるためには、腕を支点とした体重移動を体感させればいいのです。跳び箱を跳ばせられるかどうかは、このことにつきるといっても過言ではありません。

（A）の方法

（B）の方法

私は、体重移動の方法を、つぎの二つの方法で行きます（以下、本書では、(A)の方法、(B)の方法とします）。

(A)　図のように、跳び箱をまたいですわらせます。そして、腕をついて跳びおりさせます。縁側に腰掛けるみたいに、跳び箱のはじに腰掛けさせてやらせることもあります。両足のあいだに入れた両腕で身体を持ち上げさせ「跳び箱を跳ぶというのは、このように両腕で体重を支えることなんだよ」と、説明します。そして、「体重のかかり方が、かわるだろう」といってゆっくり跳びおりさせます。

ふつう五、六回やらせます。

(B)　そのつぎに、教師は跳び箱の横に立ちます。

図のように、走ってくる子の腕を片手でつかみ、おしりを片手で支えて跳ばせます。体重の重い子は、片手だけでは支えられませんから、そういうときは両手でおしりを支えてもいいのです。かよわい女性は（男性も、両手でやればいいのです。

練習しているうちに、手にかかる体重が軽く感じてきます。それは、とってもよくわかります。「もう大丈夫だな」と思ってから、二回ぐらいよけいに跳ばせます。そして、手で支えるふりをしながら、突然に手をひっこめてしまいます（私の場合はここまで通例、七、八回です）。

これで、ほとんどの子は跳べるようになります。跳べたらもう一度すぐにやらせます。ふつうのクラスなら、子どもたちの拍手が起こるはずです。跡べた子を胴上げしたというクラスもあります。

(A)、(B)の方法でやれば、ほとんどの子は跳べるようになります。私の体験でいくと九五パーセントはこえます。

これを「段差の石拾い」「道具の切り出し」の二つの例に説明する。

よくない例を示す。

「これから段差の石を拾います。ごみなんかもあったら拾って、ごみ箱へ持っていってください。もぐり込んでいる石はそのままでいいです。ガラスなどを拾う時にはよく出立して、ケガをしないようにしましょう。

拾った石はバケツにいれます。バケツは教室のところにあるから数かがとりにいって下さい。そうね、田中君と吉田君にバケツ係をしてもらいましょう。

作った後は、手をよく洗います」

思いついたままをダラダラ述べているだけである。私はこういう話し方を聞いていると イライラしてくる。子供たちも、いつのまにかおしゃべりなどをするようになってくる。

それも、どなって静かにさせる。しかし、これは教師が思い

教師はやることを具体的に示さなくてはいけない。

「これから段差の石を拾います。石はこのバケツに入れます」

これだけで良い。後は何も言わなくても子供にわかる。よけいな水はまわない方がいいのだ。

駄目な教師の共通点

伸びる資質の教師もあれば、反対の教師もいる。

中には習っている子どもがかわいそうだと思いたくなるような教師もいる。

残念だけど、それが事実である。

駄目な教師にも共通点がある。簡単に共通点を述べてみる。

一　駄目な教師の共通項、それは、「子どもができない」「子どもがきちんとしない」責任を他人のせいにすることである。これは、顕著な共通性である。「この子どもが」いのは、親に問題があるんだ」「前の担任が悪かったから駄目なのだ」この種の愚痴なく続く。「できない子をできるようにすること」や「きちんとしてない子をきちんとすること」これこそが教師の仕事なのである。

ここでは次のような技術が組み合わさっている。

Ⓐ　一時に一事の指示を与えよ。

Ⓑ　指示を与えるときは全員を三メートル以内に集めてから言え。

Ⓒ　指示を与えるときは、子どもの目の高さで言え。

Ⓓ　指示を短くせよ。できたら一五秒以内で言え。

Ⓔ　状態を説明する指示だけではなく、イメージを与える説明をつけ加

Ⓕ　子どもがやったことには短く評価を与えよ。

五つの補則

(1)　何をするのか端的に説明せよ。

(2)　どれだけやるのか具体的に示せ。

(3)　終わったら何をするのか指示せよ。

(4)　質問は一通り説明してから受けよ。

(5)　個別の場面をとりあげほめよ。

授業の原則

1　第一条＝趣意説明の原則／12
2　第二条＝一時一事の原則／19
3　第三条＝簡明の原則／22
4　第四条＝全員の原則／27
5　第五条＝所持物の原則／35
6　第六条＝細分化の原則／39
7　第七条＝空白禁止の原則／43
8　第八条＝確認の原則／47
9　第九条　個別評定の原則
10　激励の原則

教育学がイラストで

教師の仕事 365日の法則

向山洋一・前田康裕 著

1998
明治図書

教職概論（12月13日）リアクション　教師の技術、知識について

1

前回のリアクションを読んで、グループのほとんどが、日本的な考えが大事だと思っているということがわかりました。子どもとの距離が近いほど授業も楽しく行えるのではないかなと思うところも意見が同じであることがわかりました。メリットデメリットも似た部分が多くあって、目指す教師像や学校づくりに対して同じ方向性になってると思いました。
向山洋一さんのプリントに関しては、指導の仕方として良い悪いがはっきりと書かれているので参考になるなと思います。ダメなところを指摘するのではなく、出来ている良いところを見つけて褒めるというところは、実践したいです。これは、普段の生活でも行えそうなので訓練していこうと思います。
テスト問題をやってみて、途中までしかできなかったけれど半分もできなかったです。指導要領をしっかり読まなければならないということがわかりました。他の問題も解いてみて自分の足りないところを見つけていきたいと思います。

2

教師は「教育のプロ」であり「教えること」を専門とするという言葉を見て、教師を目指すことに不安を抱いた。私たちも病院に通うとき、技術のない医者に診察を頼みたくはないのと一緒で、親も教えることのできない教師が子どもの担任になったら不安どころか抗議になると思う。教師を目指す以上、知識をつけて責任を持って仕事をしなければならないと改めて考えさせられた。「できない子をできるようにする」「きちんとしていない子をきちんとする」ために、授業を教えるに当たって教科書だけに頼るのではなく、自らの工夫が必要だと感じた。

3

向山洋一さんの本を読んだことがあったので、今回の跳び箱の跳ばせ方について読んだことがあった。向山さんの教育における考え方はすごく面白いと思う。また、自分の意見をそれに対する反対的な見解をさせている所もあるのでとても良いと思う。教師について分析しており、教師の仕事とは何かということを記述している。どの話しも自信があり、情熱をもって子供たちと接してきたことがわかる。向山さんの教育観はとても素晴らしいと思う。

4

教師は「教育のプロ」であるが、医師や大工、自動車学校の先生は、「よく分かりませんが、とにかくやってみます。」では許されないのに、教師だけは「一生懸命やってみます。」と言って許される部分がある。
これはなぜなのか考えてみた。私は、教師はある程度の知識を持っていることは当たり前だが、児童と生活していく中で児童から新たに学ぶことがたくさんあるから、完璧に教えられないとしても、その時その時で自分も勉強（復習・予習）をし直すことで教師として成長することができると思う。だから、他の専門職と違って、最初から技術方法が完璧でなくても許される部分があるのだと思う。
授業開始のチャイムが鳴って「起立・礼」の挨拶は確かに「これから授業が始まる」という合図（心の準備・切かえ）にはなるが、日が経つにつれ、それは習慣化されだんだん「お願いします」などの声も小さくなり、何のために行っているのかも分からなくなっていると思う。これをやることによって本当に意味があるのか知りたい。

5

向山洋一さんがいうように、どんな職業の人でも、その仕事の技術という方法をもっているということは、仕事をする上で忘れてはいけないことであると思った。医師や大工など技術が出来れば許されないが、教師にそれにたとえ、どうにかなってしまうという状況は問題として取り上げなければならないことであると思った。
跳び箱を跳ばせることを取り上げても、方法はいくつかあり、段階を踏んで説明できる必要があるが、それについてできない、できるというのは分かってしまうのは事実である。ここから、教師はこのようなことができなければならないのに対し、できない場合は補助する必要があり、また教師と協力し頼りて自分自身成長していこうとしなければ、子供を教え育てる立場に値しないと感じた。
試験問題については、これから本番に向けてより一層勉強していかなければ身につかないと改めて感じ、教職教養の内容は特に難しく、アカデミーを受けていても知らないことが多いため、これから重点的に強くしていく必要があると思った。（40点）

6

教師は、児童生徒や保護者に対して、優しい心や一生懸命な姿勢、努力だけでは、信頼に欠け、頼りないように感じるだろう。教師は教えることの専門家であるため、教育方法・技術について十分な力が備わっていることが求められて当然である。今、私たち学生は、気持ちはあっても、教育技術については未熟で、これからそれを身につけていく段階である。現場に出ないと身に付けることができないこともあるだろう。
教師はそう考えるととても大変な職業であると思った。授業もそうであるが、生徒指導もできて、その他の様々な力、知識が求められる。それなのに、教師はなめられ、保護者から一方的に要求を押しつけられることがとても理不尽で、おかしなことだと思った。

16/30 問　最後の教養問題は何度か解いていて、全部とれた。
32点

7

資格として取得した時点で教師としての最低ラインはクリアしていると考えることもできる。しかし、教師としての能力は、ペーパーテストや面接だけではかることはできない。そして、常に教え方について模索していく必要があると感じた。教師として、技術の向上が必要であることを考えさせられた。
「駄目な教師の共通点」を読んで思ったことは、「確かにそのとおりだ」ということである。できない子をできるようにするための工夫を出来るようになるまで考え続けることがプロとしての教師なのだと思う。

12/13 正解　勉強していないわりに間くことが出来たと思います。でも、勉強しなければわからないこともあるので、そこにきちんと勉強しようと思います。

8

教職教養の問題をやってみて感じたことは、道徳で少し似たようなという印象だった。しかし、解いてみると、自分のは難しいと感じたただ勉強不足だった。意外できていたので、想像よりは良かった。最後の英語の問題もこのテストで問題として出るのだなと思った。時数が多いので、時間を少しでもなく考える時間があまりなかったのも、勉強しようと思った。

テスト 12点

9

意外に試験問題は今までに学習したものが出ていた。しかし60点中30点しか取れなかったので、もう少し学習しないとまずいと思った。教職教養の試験の先輩の平均が39点ということであと少しなので40点に超えられるように勉強したいと思う

10

今回の生徒指導での教育相談の問題を解いてみて、第一に考えるべきは、教師の仕事では一貫性によっての、揺らがない信頼が大切であるという生徒の学習に対するモチベーションが少し強いと感じた。
実際に学習を利用し、教職教養の問題を解いてみて、意外とできるものだと感じた。常識的に考えて解くことが大切。この結果を受けて、安心したが、実は満点がいいと思った。
ちなみに、44点でした。

11

初めて採用試験の問題に触れて自分ができませんでした。これから勉強する中で問題を理解する力をつけていきたいと思います。